

「風刺画と表現の自由」について考える

2015 2 4 須田 稔

2月3日付『毎日』が「オピニオン」ページ「社説を読み解く」で「社説」を再録し、論説副委員長による論説室内の議論も報道しての論述を加え、「世界の声」を紹介した。WE CURSE THE PROPHET CARTOON MAKERS と書かれたプラカードを掲げるパキスタンでのデモと、JE SUIS CHARLIE と書かれたパネルを手にするカナダでのデモの写真もつけて。「異なる価値観の共存目指して」「節度や良識という物差しの危険性認識を」という見出しも良い。秀逸のページだと思う。

僕の関心は「世界の声」にある。諷刺を容認するのは、フランスのペルラン文化・通信相で「ユーモアが有り無遠慮で時には挑発的ですからある。これこそフランスの精神だ」。そして、英フィナンシャル・タイムズの社説、「いかなる民主主義社会でも、宗教的信条を揶揄する場合の分別と妥当性について、開かれた議論をする必要がある。すべての宗教は、信仰がますます政治化している中、意見や分析、諷刺を容認しなければならない」。

諷刺反対論は、イスラム教スンニ派の高位法学者アズハリ師、「欧州社会で宗教が軽視されるようになったことは、道徳観の低下につながっている。他者への配慮を欠く行為を「表現の自由」だと一方的に訴えるのは、そうした風潮の表れだ」。米ニューヨーク・タイムズのバケット編集主幹、「意図的に宗教的感情を害するものは通常、掲載しない。多くのイスラム教徒が預言者の画像掲載を本質的に攻撃的と見なしている」。フランシスコ・ローマ法王、「人の信仰を挑発したり、侮辱したり、笑いものにしたりすべきではない」。

中間派というのが適切かどうか、インドのタイムズ・オブ・インディアの社説、「多くの国が表現の自由には限界があると認識しており、どこで線引きをするのが違うのだ」。

「自らの信じる宗教を侮辱されたら抗議するが、他者の表現の自由はいのちをかけて擁護する」という論がある。問題は、他者が私の宗教を侮辱することも表現の自由だと強弁するときも、私はいのちをかけて表るか、どちらを選ぶのかなのだ。

エドワード・サイードの著書の邦訳に『イスラム報道』（みすず書房・1996・2001）がある。原著の副題を日本語にすると、「他の世界をどう見るかはマスメディアと専門家が決める」だ。

僕も戒められていると痛感するくだりがある。「西洋が非西洋世界について身につけている知識の大部分は植民地主義を通して得たものである。ヨーロッパの学者は、したがって、自分の研究対象に支配者の立場からアプローチし、その問題で彼が述べていることは、ヨーロッパ人以外の学者がかねて述べていたことについては全くと言ってよいほど言及していない。・・・イスラム及びイスラム圏の人びとについての知識は、総じて、支配と対決の関係のみならず、文化的反感から発したものと云わざるを得ない。今日、イスラムは西洋と激しく対立するものとして否定的な扱いを受けている。そうした緊張関係がイスラムをひどくわかりにくくする枠組みを作ってしまった。この枠組みがあるかぎり、ムスリムにとって強い生きた体験であるイスラムは理解され得ない。このことは不幸にして、とりわけアメリカにあてはまり、ヨーロッパについては、やや症状は軽いといえる（191ページ）

1990年7月末、イラクのクウェイト占領。8月6日、国連安保理、イラク経済制裁を決定。8ヵ月後、イラクは国連安保理の停戦決議を受諾。湾岸戦争終結から10年、イラクへの経済制裁に固執する英米が、英米の良心的知識人・人道論者、ノーム・チョムスキーやエドワード・サイードによって批判されるようになった（酒井啓子『イラクとアメリカ』岩波新書・2003。145ページ）。チョムスキーは言う。「サダム・フセインは執念深い暴君で、究極の脅威である。だから爆弾を落とせ。制裁をかけろ」。よし、いいだろう。だが、その暴君がイラクの国民に化学兵器を使った時、英米は何をした？彼を支援しただけだ。・・・しかも軍事転用可能な物資を与えて」（146ページ）。

暴政に対して軍事攻撃・経済制裁は容認される。しかし、もはやわれわれにはなんの脅威でもない従順な指導者にたいしては人道的扱いが必要だ、ということになる。真正の人道主義はどうあるべきか。真正の表現の自由は、真正の諷刺は、どうあるべきか。僕は錯誤しながら模索しなければならない。■